



竹千代賞

とうひ

水島 瑠花

「あんた、ハゲてない？」

リビングで、うつらうつらしていた私に、その母からの一言は強烈すぎた。立ち上がって、せかせかと洗面台に向かう。風呂が沸いてもいつか入ると言って結局冷めた風呂に入る毎日を送っているような、ぐうたらな私をここまで焦らせたのだから表彰ものだろう。

洗面台に着くなり、私は髪の毛をかき分けて、鏡に頭のとっぺんを見せた。目玉を上向きに転がし、一刻も早く確認しようとする。鏡に映った自分の頭上には、確かにいつもよりも肌色が多かった。

「……ハゲてる」

こぼれ出たため息。頭髮のところどころに空いた穴。これがうわさに聞く円形脱毛症か……そんな具合の落胆。瞬間、喉にこみあげてくるものがあり、私は反射的に自室にこもった。寝室の扉を閉めながら、どうして涙が止まらないのだろうと思った。情緒と理性は別物だ。過去も人前でうっかり泣いてしまったのに、理由をうまく説明できず、さらに泣いてしまったことがある。

第一、髪の毛はどんなに嘆き悲しんだところで、すぐ生えてくるものでもない。これは周知の事実だ。そして、調べたところ、円形脱毛症は服薬による治療法があるし、自然に治ることもある。心配には及ばないはずだ。では、前提を確認したところで本題に戻るが、何故これほどに悲しくなったのだろうか。常に他人から隠さなくてはならない「穴」を抱えてしまったことに対する、一種のやるせなさなのか、テレビでよく目にするハゲいじりを、これからは「明日は我が身」と身構えなくてはならなくなった恐怖なのか……パッと思いつく理由を挙げ連ねても、いまいちピンとこない。そもそも、私はTシャツにジーンズで週五回通学しても平気なファッション無頓着人間だ。みっともないハゲ方をしたところで、今更、何を取り繕うものがある。いや、ない。

ならば、何がそんなに私を悲しませる。布団にもぐって、さらに思いを巡らせた。その末に私はその謎を解くヒントを、父の何気ない一言に見出した。一言と言っても、自室にこもる数分前、円形脱毛症に慌てふためく私を横目に、父がぼろっとこぼした呟きだ。

「まあ、頑張ってたからね……」

父は、私の円形脱毛症の原因がストレスの蓄積にあると言いたいようだった。とはいえ、私も円形脱毛症の原因にストレス疾患があるのは知っていた。しかし、他者からそう言われてみれば、私の円形脱毛症の原因もまたストレス疾患であると認めたくなくなる。

遺伝や睡眠不足、風邪……調べてみれば、他の原因も見つかるのに、ストレスが原因だと考えてしまいがちなのは、私のストレスに思い当たる節がありすぎるからだ。私は入学してしばらくして、急に短期大学生の身の危うさを憂いて、西へ東へ奔走するようになった。知らない場所に行き、知らない人と話をするような機会が短大生になってから急増したし、むしろ自分から増やすこともあった。

私はインターンへ行ったり、こども館へボランティアに行ったりと、能動的に活動するようにしていた。イ



ンターンでは今まで意識していなかった業界にも興味が持てたし、こども館の館内スタッフのボランティア活動では、子どもにもおもしろい遊び方を説明するのが案外楽しく、人に物事を説明するのが好きだと気がついた。このように新たな知見や発見があったからよかったものの、前提として、私がインターンやボランティアに参加した理由は、明確な将来のビジョンに向かって……であるとか、地域貢献を目指して……という崇高で同情を買える動機では決していない。苦し紛れに好意的な言い方をするならば、自分探し、である。私が出向いた先々で、本当の動機を口にしていたら、きっと多くの大人を不幸にしていただろう。それがわかっていながらも、何か行動を起こしたのは、仮想敵の存在が大きかった。私は動いている人はもう動いているからと、仮想の同世代を脳内に生み出して、それを敵と見立てて競っていた。これがストレスだったかと問われれば、おそらく、多分、きっと、頷くべきなのだろう。

今、歯切れの悪い言い回しになったが、その理由は、仮想敵との競争を降りるのが怖いからだろう。というのも、仮想敵との競争は悪いことではないはずだ。就活の話は友人に話しにくい話題だとキャリアデザインの非常勤講師が経験から語っていたし、実際、私も友人との会話の和を乱したくないという理由でうまく相談できずにいる。ボランティアについても、あまり世間、特に同じ大学生からの印象が良いように思えない。「大学生 ボランティア」と検索エンジンに打ち込むと、「うざい」と嘆かわしいおまけがついてくる。気にせず悩んでいるなら話せばいいのに、他人の目や評価が怖くて委縮している。高校時代までに集団生活の中で培ってきた自意識過剰さが、ここでもいかにくなく発揮された。どうやら、「相談をする」という選択肢を断つと、「行動に移す」という選択肢は本来ポジティブなものであるべきなのに、「しょうがない、動くか……」という消極的なものになるらしい。悲しい大発見だ。他者からの評価を気にしすぎてしまうが、行動のモチベーションを保つには、仮想敵を生み出すまでしてでも、他者を意識しなければならぬ。

私の心理に踏み込んだことを言えば、おそらくそんな具合なのだろう。矛盾した言動に不安を抱えながら、

無理してなりふり構わず行動している、それが私のストレスなのだ。そもそも、インドアで友人も少ない私にとって、外に出て活動する時点で無理をしているといえる。それを無理だという見通しに気が付かないふりをして、インターンシップやらボランティアやら詰めるだけ詰めたのだから、パンクしても何もおかしいことはない。と、発覚の日は、そのような結論に至った。

それから、円形脱毛症を自覚した生活が始まった。日常のふとした時、突然気になってくるので、時折、鬱陶しさを感じさせる。ただ、そんな日々でも、この頭髮に空いた穴が、勲章のように思えた時期もあった。円形脱毛症に気が付いて数日後のことだったと思う。インターンもボランティアも短期的に見れば、自分に返ってくる物質的な得はない。残るのは経験と疲れ。労わろうにも、実績はないのだから労わりにくい。円形脱毛症とは、そんな私を表彰するために現れた、歪んだ勲章なのではないか、という思想である。自信をたたえ、ねぎらい、労わってくれる証、それが円形脱毛症として現れたのではないかと。

しかし、これは幻想だと、すぐに私は私に反論した。私が他人からかけてほしい言葉を、円形脱毛症に投影しただけだ。一個人がインターンやボランティアに行った話をしても、大した引きはない。これは自分で勝手に行っているものだから、体験したことを話したところで、他人からの興味を引くのが難しい。その一方、円形脱毛症になったと言え、私を好意的に見ている多くの人は心配してくれるだろう。人類誰しもハゲたくない。故に、同情を買うには容易い。短期大学の教員に一月の円形脱毛症になった話を書いたレポートを提出したときも、「夏休みはリラックスしてね」と声をかけられた。しかし、たかが他人である。傲慢極まりないことを言うが、周囲の人間が私のピンチで優しく接してくれるのは当然だ。だから、自分という一番嘘偽りない存在から、心配してほしかった。そんな心理で、円形脱毛症（＝勲章）を授かったと思いたかったのだろうと推測する。実際には、そのような感傷的な理由などなくて、ただ、ストレスが一定量溜まったから現れただけに過ぎないのだ。



このように、勲章説を必死に否定することで、私は私自身を休ませるのをひたすらにためらうように仕向けていた。動くのをやめたら、私は、将来どうなる。勲章なんて甘ったるいことを言っている場合ではない。円形脱毛症は、将来のビジョンも描けないまま、のほほんとここまで来た私へのツケの領収書に決まっている。……と、不利益なことばかりをささやき続ける非情な勢力が私の中には存在する。これは、私が私を叱咤しているのではなく、迷いの表れだろう。葛藤はいついかなる時も人間を悩ませる。道端で拾った財布を交番に届けるか、ネコババしてしまうかを葛藤する、かの有名な「天使と悪魔」のコントの、まさに、「天使」と「悪魔」が、拾った財布というスケールを飛び出して、人生の至るタイミングで襲い掛かってくる。

人生はコントのようできて、コントではない。軽々しい判決を下し、この果てしない悩みに「オチ」をつけるわけにはいかない。ただし、だからといって、いつまでも悩んでいては時間の無駄でしかない。いや、果たしてそうだろうか。時間の無駄だと言って、急いで出した結論は杜撰ずさんなものにはならないか。

私の葛藤は本題と外れたところでも対立が起こり、そちらに体力を割かなければならなくなることが多い。おい、私。そんな冷静に分析していないで、必死に問題に向き合ったらどうなんだ。そうは言っても私よ、悩み事を抱えているときにおいて、自分が今何で困っているのか把握する姿勢として冷静さは必要なはずだ……と、こんな具合だ。場外乱闘に次ぐ場外乱闘、そうしてまたストレスがつのる。

そうして、私は当初何故涙したのかを明らかにしないまま明日を迎えるのである。